

# 対談 「ポリゴノーラの魅力と未来」

灰野敬二 / 櫻井直樹

2022年10月25日

於 灰野敬二宅

## ポリゴノーラは、僕の“新しい武器”です

**櫻井** 今日はお忙しいところ、お時間をいただきありがとうございます。早速ですが、灰野さんにポリゴノーラを演奏していただくようになって、ずいぶんたって今更にお聞きするのもなんですが、なぜポリゴノーラを演奏していただいているのでしょうか？

**灰野** わかりやすいですよ。端的に言います。僕の新しい武器だからです。

**櫻井** よくわかりますね。

**灰野** でしょ。いつも武器を探していますから。僕はいつもシンプルですよ。

**櫻井** ポリゴノーラを演奏されていて、真ん中とか端とか、たたく場所によりいろいろな音色が出るとは思いますが、その音色についてはどうお考えですか？

**灰野** 僕がポリゴノーラをやりたい、と思った時に、はっきり言えるのは、これは他とは違う。ピッチの並びがどういうものかという以前に、音を出してみて、ミュージシャンですから、これは他とは比較できないよな、というのが一番で、だから、合間をたたくのが好きなんですよ。

**櫻井** 合間？

**灰野** いわゆる、櫻井さんが言われる、“ピザ”と“ドーナツ”（※1）のどっちでもないその合間を出したいのですよ。

**櫻井** なるほどわかりました。その音色がいいんですね。

**灰野** いいというより、「武器」です。

**櫻井** ポリゴノーラの演奏を始めるとき、今日はどのように演奏しようとか、事前に決めておられるのですか？

**灰野** ないです。まさに、どのような言葉を選べばよいかわかりませんが、まさに、その時ですね。その場で……、言い方を変えるとすれば、会場によって音は違うし、お客

さんが入っちゃった、うれしい悲鳴、でも響かなくなっちゃった。だから始めないとわからない。そして、始めて最初の5分くらいは、どういう響きを今はしているかがある程度調整しながら、「あ！リハーサルの時は、音階1のポリゴノーラが会場にすごく蔓延していたのに、ちょっと低い音が吸収されちゃう」、そうだったら音階5のポリゴノーラにしよう。

**櫻井** お客さんが入ると音が吸収されるのですね。

**灰野** そうですね。特に洋服ですね。冬になると、特にコートが吸収します。

**櫻井** 特に低い音が吸収されるのですか？

**灰野** そうとも一概には言えません。場所によります。反対に、天井が20メートルくらいあって、リハーサルの時は響きすぎて、ボアーンとなって音の輪郭がなくなってしまうのが、お客さんが少し入ってくれることにより、響きが抑えられます。本番で音を出してみても、大概はこれじゃないよな、って思うんです。本当にお客さんが入らないとわからないんです。

**櫻井** へえー。

**灰野** 望むなら、変なことを言いますが、これだけAIが発達しているのなら、怖いほうに行くのではなく、文化に役立ってほしいと思います。

**櫻井** 怖いほう、とはどういうことですか？

**灰野** 人を操ることになるでしょう。

**櫻井** 人工知能が人を操るということですね。

**灰野** 私は、絶対抵抗します。

**櫻井** 私も抵抗します（笑）。人間はそんなものじゃないと思いますよ。

**灰野** 僕もそう思います。ちゃんとしてれば。

**櫻井** ちゃんとしてれば、ですね。

**灰野** そう。ちゃんとしてなければ、居心地がいいのでそこに洗脳されてしまいます。

**櫻井** たとえばボーカロイドなどはどう思いますか？

**灰野** 全く興味ないです。

**櫻井** 私もですが、あれでいいんですかね。

**灰野** やっているやつも面白くないし、知り合いの知り合いくらいですが。いやー、僕には全く影響がない。どうなんだろう、ああいうものもある。反対が出てくれば、さらにその反対も出てくる。やっぱり、いまCDが廃れ始め、僅かですが、僕たちに馴染みのあるレコードが若者たちに流行りはじめています。

**櫻井** レコードの音は、CDとは全然違いますね。

**灰野** 全然違う。若い子たちはCDを親から聞かされて育ち、知らなかったわけで。やっぱり今では簡単に検索できるから、自分で考えたのではないけれど、これは怖いことになるんだけど、新しい一つの情報として「アナログって何だ」って追いますから。単純に空気に触れていないものを音楽って言っているのか、ってなるんですよ、ありがたいことに。だから、ボーカロイドが出てこようと、政府が、大袈裟ですが、管理しきってデジタルしか認めない、音楽もこういう音楽でなければいけないとか、そうなってきたら別ですけど、全員

” 阿呆 “じゃないでしょう (笑)。

**櫻井** わかります。昨日、芹沢銈介っていう染色家の弟子になっていた人と話をしていたのですが、昔は手で小刀を使って型紙を切って染色していたのですが、今はそんなこと誰もしない。全部コンピュータで型紙を作るんですって。

**灰野** あっちゃ。面白くないでしょう。

**櫻井** そうなんです。非常に残念なんです。でも、きっとわかると思うのです。その線、つまり、アナログとデジタルの線の違いがきっと皆にいつかわかると思うのです。

**櫻井** そうですよ。わからないと滅びますよ (笑)。

## 戦時中にピアノを弾きまくっていた叔父さんが、僕の親分みたいなものです

**櫻井** さて、灰野さんの演奏について伺います。いつも即興演奏されるのですが、こういう聞き方もなんですが、どうやって即興が出てくるのですか？

**灰野** あのね、今日は絶対その話になるな、と思ってシンプルな言葉を用意してあります。櫻井さんを、先生たちと呼ばせてもらいますが、僕は先生たちとは全く違う、でも全く違うから楽しめる、仲良くできる、と思っています。おそらく先生は、知性を勉強したんですよ。僕は精神を勉強しました。で、即興ができるのです。

**櫻井** なるほど、私にはできない (笑)。

**灰野** 考えていないです。

**櫻井** そうですねきっと。

**灰野** それこそ、昔から音楽家によく言われる、降りてきますよ。非科学的ですが、そ

うとしか言えないです。

**櫻井** きっとその能力が人間にはあるのですね。他に即興される方もそういう風に言っておられます？

**灰野** 口では言います (笑)。皆、リハーサルでできていたものをやりたがります。僕はやりません。

**櫻井** 灰野さんは全然違いますものね。

**灰野** 僕はリハでやったものはやりません。バンドをやっていて、リハでやっていたものを時々忘れることがあります。メンバーは、あれ、もう 1 曲あったのに、終わっちゃった、なんて (笑)。

**櫻井** そうですか。

**灰野** 即興って、その概念は僕には千通りくらい説明できるかもしれない。いろんな角度から。ただ、できるようになったのです。知らないところでの訓練をしているのです。

**櫻井** 即興ができるようになったのは、何歳くらいからとありますか？

**灰野** いやー、知らないうちに (笑)。それこそ大袈裟ですが、音楽に身をささげているから、それこそ音楽の女神が微笑んでくれて与えてくれたと思っています。

**櫻井** プレゼントですね。

**灰野** 先生から見てわけわかんないと思いますが、17 歳のころ自分でギターを弾かないと、面白い音楽、曲を作れないと思いたったのだけれど、とにかく今までにあったことはしたくない。それは、自分の頭に組み込まれていることなんだけれど、そばに兄貴のギターがあったので、とにかくギターを 30 分睨んでいたのです。

**櫻井** 睨んでいたのですか。こいつはどういう奴かって。

**灰野** 毎日見てました。ペグ (糸巻) というものが 6 つある。弦が 6 本ある。フレットがある、ボディがある。これをどうやって組み替えようかって。

**櫻井** え？ ギターを組み替える？ それは見ないとだめですね。

**灰野** ジーと見て、でも実際にはできないでしょ、具体的に。形態を壊す気はない。ただ、概念として、弾くとか、指を動かすとか、そうじゃない要素を取り入れようという意識が芽生えました。

**櫻井** つまり、他の人がやっていないやり方でギターを演奏しようと。

**灰野** もちろんです。そこを変えたかったのです。

**櫻井** 前から、私と似たところがあると気になっていたのですが、他の人がやっていることは面白くないのです。

**灰野** 生のギター、一回聞きたい。

**櫻井** いやー、私のギターは普通ですよ（笑）。

**灰野** でもそういう思いがあってクラシックのギターを弾いていたわけですよね。他の人とはなんか違うものになりたい。

**櫻井** 灰野さんほどすごくないんです。でも、他の人と違うことをやりたいという考え方、価値観はどこから来たのでしょうか？

**灰野** これは、話し出すと大変ですよ。

**櫻井** やってください（笑）。私が見るに、なんとなく灰野さんはアウトロー的なところがあるでしょ。それが私と非常によく似ている。

**灰野** 初めに櫻井さんとお会いして、ポリゴノーラをボンと出して、ボンとたたいた時、接点ができちゃったんですよ（笑）。

**櫻井** いや、私もあの時、前から知っている人かなあ、同じ仲間かなあという気がして。

**灰野** いやいや、僕もそうですよ。僕はもっとシンプルで、僕のために楽器を作ってくれたって（笑）。

**櫻井** ああ、そうでしたか。

**灰野** 僕は、何度もみんなに言っています。櫻井さんという気遣いがあるって（笑）。

**櫻井** その気遣い同士が合うんですね。

**灰野** そうだと思いますよ。だって、妹さん（桜井真樹子）も気遣いじゃないですか？

**櫻井** そうですね。

**灰野** 失礼ですが、（櫻井）元希君も気遣いじゃないですか？

**櫻井** 櫻井家はどうなっているのかなあと思うんですが。

**灰野** 櫻井家全体を尊敬します。真面目に。

**櫻井** 私も、それがどこから出てくるのかなあ、と最近考えるのですが、同じ意味で、灰野さんもお父さん、お母さん、叔父さん、叔母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、何かあるのですかね？

**灰野** 叔父さん、変でした。

**櫻井** 叔父さんが？

**灰野** 叔父さんは生きていれば 110 歳くらいですが、戦時中、真っ赤なシャツを着て髪を伸ばして音大に行っていたのです。ピアノを弾きまくって、非国民といわれて、徴兵されなかったそうです。その叔父さんが、僕の親分みたいなものです。

**櫻井** その遺伝子がありますかね？

**灰野** あります。調べたら面白いと思いますよ。

**櫻井** それこそ、NHKの「ファミリーヒストリー」で調べてもらおうと、いろいろ面白いことがわかるかもしれませんね（笑）。

**灰野** みんな、やっぱり何かあると思いますよ。

**櫻井** 最初普通の人がかうなるわけがない（笑）。何か遺伝子があると思います。

**灰野** あると思います。それこそ解明できないですよ。ここに写真があるのですが（<sup>なげし</sup>長押にかかっている写真を指しながら）、うちの場合は、母方が神社で、全部家系があります。母方は秩父で三峰山の家系です。父方は新潟で、おばあちゃんは、いわゆるお寺のお姫様です。

**櫻井** 端正な美人ですね。

**灰野** 僕もそう思います。新潟のおじいちゃんは、当時140年前、新潟で英語の先生をしていて、しかもギターを弾いている。

**櫻井** そんなころにギターがあったんかいな。

**灰野** ありえないでしょ。

**櫻井** ありえないですね。

**灰野** で、これからが問題で、灰野家はその先がわからないのです。

**櫻井** おじいちゃんの、その先ということですか？

**灰野** はい。おばあちゃんのほうは、お寺なので家系があるかと思いますが、どうもおじいちゃんのほうは大陸からやってきたんじゃないかなあとと思います。

**櫻井** なるほど。大陸ですか。

**灰野** それも、ロシアのほうから。

**櫻井** エーッ。

**灰野** なんとなく。

**櫻井** でもそう思うと、顔が。

**灰野** 父親は特にそうです。僕は母親似だから、そうでもないのだけれど、やっぱりありますよ、血は。

**櫻井** ありますね。私も櫻井家でよく思うんです。

**灰野** 櫻井家は、何かの残党のような気がするなあ。落武者の。

**櫻井** 私もよく思うのですが、江戸時代って、反乱した人が殺されているでしょ。だから、日本人は全体としておとなしくなっちゃってるんじゃないかな、って思うんです

よ。その人たちが生きていれば、日本ももっと反骨精神に富んだ人が多かったのではないかと。だから、私はその人たちの子孫かもしれない。

**灰野** 先生、失礼ですが、小学校、中学校、高校、大学と何か反抗して生きてきた人なんですか？

**櫻井** そうですね、それこそ、中学校で東京の自由学園に1年半だけいたのですが、1年半くらいして、東京の人とは合わないなあと思って、やめたのです。実は昨日、その時の友達と食事をしていたのですが。

**灰野** それって失礼ですが、ご自宅が裕福だったのでは？

**櫻井** ある程度はそうだったと思います。両親は大阪にいたので、私は寮にいました。

**灰野** その中学校に行きなさいと、ご両親が言ったのですか？

**櫻井** 母親です。

**灰野** でもあれですよ、今ふっと思い出して失礼ですが、トマトの研究をしていて、「なんというしょうもないことをしてきたのか」、と言ったお母さんですよ。

**櫻井** その母親です。

**灰野** そうか。

**櫻井** 母に、「世界中で毎日トマトを切っているお母さんが知っていることを研究するなんて、税金の無駄だ」、と言われたのです。それで、くそっと思って、なんとか鼻を明かしてやりたいと思って、研究して今ここにいるのです。

**灰野** でも、十分鼻を明かしていますよ。兵器を作ったのだから（笑）。

**櫻井** だからあの一言がなかったら、今日ここには来ていないと思いますよ。

**灰野** すごいですね。じゃ、妹さんは普通だったのですか？

**櫻井** 妹は、大学に行ってから自分のしたいことを見つけたようです。

**灰野** それまでは従順だったのですか？

**櫻井** それまでは、普通にピアノをしていたのですが、大学に行ってから、現代音楽や踊りや衣装、つまり総合芸術に興味を持ったようです。私より変わっていると思いますね。

**灰野** どっちもどっちだと思いますね（笑）。でもおそらく、最近になって、そうだね、ってなったんですか？

**櫻井** だいぶ歳が離れているので、彼女が大学に入ってから普通に話せるようになりましたね。私が30歳になってからです。二人とも音楽には興味がありましたから。

## 何か一個をやり尽くそうと思ったら、体の一部が壊れるんです

**櫻井** さて、次にポリゴノーラの形についてお聞きします。大きなポリゴノーラや、いろいろな形のポリゴノーラがありますが、灰野さんにとって好きな大きさとか、形とか、音とか、ありますか？

**灰野** ないです。みんな好き（笑）。シンプルです。みんな好きイコール、さらに、今まで聞いたことがない音を聞きたい、出したいのです。3日後にジャズのコンサートをやるのですが、それも今まであったジャズとは違うものをしたいのです。でも、1回やっちゃうと普通の人より飽きるのが早いのです。3回やると、自分でもうわかった。表面的かもしれないが、これでとりあえず今欲しいここの情報は手に入れた。次はここをしようかな、となります。そうやって、いろいろやって全部をレベルアップできていると思います。ふつう一つで完結すると、ああジャズはリズムは面白いが、和声あまり面白くないとか、ロックは単純で面白くないなあ、とか、それで終わってしまう。でも私は全部好きなんです。だから、いま頭の中は、ごちゃごちゃです（笑）。でも、ひとつポリゴノーラに苦情があって。

**櫻井** 是非聞きたいです。

**灰野** ポリゴノーラをやって、耳を壊しました。

**櫻井** それはわかります。この間、「菖蒲冠（あやめこうふり、2022年6月4日、於生田緑地菖蒲園）」で演奏したとき、外だったでしょう。室内とは全然違う響きがしたのですが。

**櫻井** でもね、その会場とか大きさじゃなくて、真上でたたくと、僕に一番来るんですよ。いわゆる、何の楽器よりも高い倍音が出るでしょ。それが全部僕に聞こえるのです。多分、今までも大きな音を出して、人から「灰野さん大丈夫ですか、そんな爆音出して」と言われてきたのですが、大丈夫だったんです。ところが、ポリゴノーラは別です。ですから、今ちょっと聴覚が悪いです。

**櫻井** それはいけませんね。

**灰野** ただ、僕の中で、ここが重要なのですが、何か一個やり尽くそうと思ったら、体の一部分が壊れるのです。

**櫻井** それこそ命を削っているのですね。

**灰野** 今までは、手が痛い、足痛い、首痛いとか、今回は耳が痛いんです。まだ聞こえる

し、しゃべれるし、空気吸えるし、絶対あきらめない。

**櫻井** 高い倍音が聞こえるという一つの要因は、多分、一心いっしんを使っておられるからだと思います。いわゆる木製の仏具ですね。なぜ一心を使うようになったのですか？

**灰野** どうなんだろうなあ。当たり方が、いわゆるたたいて終わらず、その弾み方とか。ある時には、2つのポリゴノーラを同時に叩ける、つまり T 字型をしているので、打楽器奏者がマレットを2つ持ってたたくように叩ける。

**櫻井** 一心からずっと離れないので、何か理由があるのかと思っていました。

**灰野** 僕もいろんなものを試したのですが、なんていうのかなあ、すぐれたものは、本来時代関係ないでしょう。ただし、組み合わせは重要です。ポリゴノーラは、西洋のマレットでたたけるものではないな、というのがあります。作曲家が作ったポリゴノーラの音は、ポンポンという音でしょう。それは僕の思っているものとは違うので。

## これからポリゴノーラをどうしたいのですか？

**櫻井** 最近、MIDI-PAD (※2) というものがあって、ポリゴノーラの音階をパッドに張り付けてみました。いろんな音がパッドに割り付けられるようになっているので、灰野さんの好きな場所を、西洋のマレットと、一心でたたいた音を別々に割り付けました。

**灰野** サンプリングしてあるってことですか？

**櫻井** そうですね。でも、ひとつのポリゴノーラだけを使って、その音をサンプリングして音高を調節すると、音高が高くなりすぎるとポリゴノーラの音ではなくなります。そこで、近い音高のポリゴノーラをいくつか選んで、あとは音高を微調整しました。

**灰野** いつか聞かせてもらいましたよね。

**櫻井** それは最初の試みのやつです。

**灰野** もともと1個の音盤だから、それを閉じ込めようとする、無理があるのではないですか？(音が)薄くなりますよ。

**櫻井** その通りですね。でも、本物のポリゴノーラは値段が高いので、これを何とかしたいと思ったわけです。MIDI-PAD にすれば、安価に済むので。

**灰野** それで、櫻井さん、今後ポリゴノーラをどうしたいのですか？

**櫻井** 今でも在庫が、100枚くらいあって、膨大なお金をかけているのに売れていま

せん。

**灰野** そこで櫻井さんにお聞きしたいのですが、ポリゴノーラを広めたいのか、それとも僕は嫌いですが、講演など話で知らしめたいのか？お母さんに「トマトのそんなしょうもないことをして」、と言われて、「ひっくり返すぞ、音楽世界を」、という気持ちで世の中に打って出ようとするのかで、リスクの取り方が違ってくると思います。僕が提案できるのは、まず美術館回りをするのがいいです。先生が講演して、僕が実演やらせてもらえればいいです。今は世の中があまりよくないから、むつかしいかもしれない。僕はすぐ学芸員と喧嘩するし。「お前バカか」なんて言うてしまうのです（笑）。1か所どこか美術館でできれば、1回そういうのをやると、紹介してくれますよ。

**櫻井** そうですね。

**灰野** おそらく、先生が喧嘩しなければ（笑）。

**櫻井** 僕はケンカしないですよ（笑）。広島市にはいくつか美術館があり、結構面白いところなんですよ。

**灰野** じゃあ、行けばいいですよ。

**櫻井** 私が質問されるとは思わなかったのですが、先ほどの質問で、ポリゴノーラをどうしたいかということですが、ポリゴノーラの音が、もしも人の耳や心に届くなら、音楽が変わると思います。

**灰野** 全くその通りです。だってそれこそ、いまデジタルで、またAIなどで音楽を作ろうとしている。人工知能なんて僕なんか寒気しますよ。

**櫻井** 要するに、アナログの楽器を触らずに作曲なんかしているでしょう。

**灰野** アナログでも、サンプリングがありますから、彼らがどこまでアナログといっているかも問題です。これは先生には失礼な言い方かもしれませんが、数字ですべてが解明できると思っていることと違う要素がなければ、AIに負けます。だって、AIは僕なんかには理解できない、ものすごい計算をするわけでしょ。

**櫻井** でも、出てくるものが問題だと思うのです。アウトプットがしょうもなかったら、しょうもないです。だから、アナログの音が気持ちいいなと感じてくれる人がいることを信じたいと思います。

**灰野** そうじゃなきゃやってられないですよ（笑）。

**櫻井** よくみんなこんな音楽で満足しているな、と思うのです。例えばシンセサイザーだけで作ったような音楽など。

**灰野** そこは、櫻井家一族で反対していますね。

**櫻井** なんとかならんのかなあとと思うんですが。

**灰野** それは、発信し続けないとだめでしょう。

**櫻井** 私が唯一光明を見つけているのが、現在ではあまりにも素人が作曲しすぎていて、本来の作曲家が飯食っていけないのではと思うわけです。これはポリゴノーラにとってプラスではないかと思うのです。つまりポリゴノーラによって全く新しい音楽ができることを、そのような作曲家が認めてくれればの話ですが。

**灰野** それは、今までのプロの作曲家にはできない作曲の仕方、という意味ですか？

**櫻井** “今までのやり方ではない” やり方、という意味です。今までのやり方では AI が音楽を作っちゃうんですよ。だから、作曲家の皆さんが悩んでいるのではと思うのですが、新しい道具ポリゴノーラと、新しい音階を使って新しい音楽が作れるのではと思います。

**灰野** それは、これまでの作曲家がそうなればですか？それとも、新しい世代の人々、今 AI などを使って曲を作っている若い人に、このような道具を与えるという意味ですか？

**櫻井** 灰野さん、どう思いますか？ 確かに 2 通りあります。いわゆるプロの作曲家たちは、これまで何百年もの蓄積があって、それをもとに曲を作っているわけです。しかし、それでは行き詰まるのではと思います。このままではいかんと思っているのではないのでしょうか？

**灰野** そう思いますよ。AI で作られてしまいますよ。

**櫻井** それに新しい材料を提供するのはどうか、と思うんです。

**灰野** それは素晴らしいと思いますよ。ただ、与えられようとしている彼らが、ポリゴノーラの意味が分からなければ、つまり、こういうものですよ、って説明をしなければならぬと思うのです。

**櫻井** それもあって、この本を書いているわけです。すぐ身につく人もいれば、それを理解できない人、応用できない人もいるわけです。逆に、全く今まで作曲をしていない人でもできるかもしれない。それはわからない。全くこれまで作曲の経験や知識がない若い人でも、この新しいポリゴノーラや新しい音階で音楽ができる人もいます。どうでしょう。

**灰野** 自分は全くその中間です。音楽に対する愛情は人より百倍あると思っています。でも、今まで伝えられてきた作曲の方法は、ほぼ無視してきました。僕の場合は、常に。50 年ですけど、ほかの、その時代にまだなかったものを自分が見つけて。若いころ

は、ここですよ、人に伝わらなくても構わない、自分がそこで充実できていれば、そして喜べていれば、人にこれを伝えなくてもいい。自分で聞いて、自分の栄養になればいい」。でもやっぱり、50（歳）を超えてから、自分の中にある気持ち、つまり継承させなければならない、という気持ちが起きてきました。

**櫻井** 私もこの5年くらいそうなってきました。継承なんですよ。せつかくこれをしてきたから、それが残ればいいなあ、という気持ちですね。

**灰野** 先生の場合は、データ、数字で解明されて伝えられるから、あえて言わせてもらえば、ある程度は継承できる。ただ、櫻井さん、いっぱいいる櫻井さんじゃなくて、この櫻井さんをデータとして伝えることはできないでしょうね。それは僕自身も全く同じです。でも、櫻井さん全体でも、この部分は伝えなくてもいい、という部分を作ったほうが良いと思います。そしたら、櫻井さんの100あった部分の、この10はいい、付属の10はいい。でも90のほうを伝えたい。だから、人に伝えるときも、1時間しかなければ全部話せないわけだから、10は話さずに90を話す。

**櫻井** 先ほど触れましたが、MIDI-PAD というのがあり、最近ポリゴノーラをサンプリングして割り付けたんです。若い人にはポリゴノーラは高く買えないです。灰野さんはすぐを買われましたよね。

**灰野** 僕はその時、ライブをする予定があったので、その収入をあてに買えたんですがね。僕はあそこ海外があったので、ギャラが正直言って違うので、1回で払えるようなギャラがもらえるんですよ。くそコロナのおかげで、海外が全部なくなっちゃいましたがね。3年行っていません。

**櫻井** 若い子にもポリゴノーラの音や音階に触れてもらいたいので、MIDI-PAD に割り付けたんです。どうでしょうか？

**灰野** まず反対の意見を言わせてもらおうと、大量にポリゴノーラを作ったら、安くなるんですか？

**櫻井** 数量によりますね。今は、1枚5万円ほどします。

**灰野** テリー・ライリー（※3）という人がいて、この人が、ポリゴノーラは新しい音楽を作ると認知してくれたら、それだけで大きな発展になると思います。

**櫻井** テリー・ライリーは今日本にいるんですよ。

**灰野** そうだと思います。

**櫻井** 妹が、今コロナで会いに行けないけれど、テリー・ライリーさんに会いに行こうかと言っています。

**灰野** ポリゴノーラを彼が面白がってくれて、それこそ、作曲もすると思います。ただ、彼のファンも限られていて、一部のファンに向けてのお祭りのなかでの発表会のようなものになると思います。ポリゴノーラはちゃんとした正式の発表会で、新しい楽器ですと認知してもらわなければならない。でも、1枚5万円は高いね。

**櫻井** そうですね。

**灰野** なんとか安くならないんですか？材料が高いんですか？形ですか？

**櫻井** 自分でもお金がなくて新しく作れなくなっています（笑）。

**灰野** いい意味でも、この言葉は違うかもしれないけれど「貴族の楽器」ですよ。

**櫻井** お金の意味ですか？

**灰野** それくらいお金をかけないとできないというのは、特殊なんですよ。

**櫻井** なるほど。どれだけ安くできるか、やってみます。ちなみに材料を鉄にしたらどうですか？リン青銅より鉄のほうが安いのですが。

**灰野** いつか送ってくれた奴ですね。あれは、全然違います。

**櫻井** やっぱりそうですよね。

**灰野** どこまで響かせるか、先生がどこで諦めるかということになると思います。

**櫻井** これは灰野さんに聞かなければと思います。

**灰野** 今のだったら、あそこまで響かなくてもいいと思います。例えば、今のはプロ仕様で、初心者のためのポリゴノーラを作ってもいいのではないかと思うんです。ギターでも1万円のものもあれば、数百万円のものもあるでしょう。

**櫻井** なるほど、そうすればいいのか。つまり、廉価版を作るということですね。

**灰野** もう一つ問題があって、ポリゴノーラという楽器の特殊性が人に伝わっていない部分があって、これ非常に重要なところなんです。たたき方、たたく場所によって違う音がする。ただ、倍音構成が違うのではない、という説明をしたほうが良い。普通のシンバルとは違いますよ、というところを強調したほうが良い。

**櫻井** 確かにシンバルは真ん中が固定されているし、材料も違うし、いろいろな点でポリゴノーラとは違います。

**灰野** ただ、それに気づけている人はほとんどいない。僕は最初に叩いた時、直感的に、何だこりゃ！と思ったんですけど、普通の人には、シンバル程度にしか思っていない。名前をちゃんと付けたのは良かったと思います。“変形シンバル”ではだめです。ポリゴノーラがほかの楽器とはどこがどう違うかということ、先生がちゃんと数字で説明したほうが良い。

**櫻井** 私は自分の原稿を読んでいても、数字が出てくると頭が痛くなります（笑）。

**灰野** 先生の資料を見ても、数字が出てくるとだめだ（笑）。

## 倍音を意識して鳴らす楽器は、ポリゴノーラ以外ありません

**櫻井** 灰野さんはポリゴノーラをいろいろな楽器と合奏されていますが、灰野さんから見て、これは合うけれど、これは合わないなあという楽器がありますか？

**灰野** 単純に電気ものとは合わないですね。

**櫻井** 電気ものとは？

**灰野** アンプを使ったりするものです。先生も一時ポリゴノーラにマイクを付けたり、いろいろしていたでしょ？

**櫻井** やってましたね。

**灰野** 具体的に、空気を動かす楽器、ほとんどの人はポリゴノーラをポンとたたいて終わりますけど、僕はそうではなく、空気を動かす。空気を動かしたいから、いろいろなたたき方をするので。空気の、悪い意味ではなく、歪みとか、モアレとかを作りたいのです。アコースティック楽器は、それに絡んだり、バイオリンでも空気に音が直接出ていくので、ポリゴノーラと絡むんです。ところがエレクトロニクスとは、ちょっと合わない。

**櫻井** それはスピーカーを通すからですか？

**灰野** いやー、やっぱり質が違うって言い方。まあ、電気楽器と普通のアコースティックな楽器があるとすれば、ポリゴノーラは超アコースティックです。

**櫻井** だいぶ電気と離れていますね。

**灰野** そう、だから、ポリゴノーラとアコースティック楽器は何とか合います。電気は違うものです。バランスとか、電気を操作する人がポリゴノーラを認識して、それに合うスピーカーを作ればなんとかなるのではないのでしょうか？大きなスピーカーで音がドーンと出ると、簡単に言うとポリゴノーラがその音圧で打ち消されてしまいます。

**櫻井** さっき、空気のひずみとかモアレという表現をされたでしょ。私も、ポリゴノーラをたたいた時に出る音の波が見たいのです。音の波を目で見たいと、ずっと思っています。

**灰野** 僕は見えてるなあ。

**櫻井** 私はさっき聞いていて、そうではないかと思いました。

**灰野** だから操れるんです。

**櫻井** その波が見えたら、皆よくわかると思うのです。いかにポリゴノーラが普通の楽器と違うかということが。でも世界でまだ音波を目で見えるようにした人はいません。

**灰野** 見つけりゃいいじゃないですか。

**櫻井** 簡単に言いますが、むつかしいですよ。

**灰野** 私は簡単に言いますが。

**櫻井** 私には、アイデアが浮かびません。

**灰野** 光とかスモークではだめですか？

**櫻井** やりました。ダメです。

**灰野** ポリゴノーラの出す音波は、もっと繊細な物質、もう物質といいますが、空気に同化した波紋のようなものではないでしょうか？

**櫻井** ポリゴノーラを作った時から、この波紋を見たいと思っているのですが、まだ駄目です。例えば、ポリゴノーラの表面に水を張って、光を当てながら叩いて反射した光を見れば何か見えるかもしれません。でもたたくと水が飛び散りますね（笑）。でも結構、音を波紋としてとらえる試みは、現代美術館でもやっていますね。

**灰野** YouTube などで見たのですが、大きなシンバルでこの部分だけ鳴らします、とか、この円の部分だけ鳴らしますとかやっていますが、倍音を意識して鳴らしている楽器はポリゴノーラ以外にはありません。ポリゴノーラをたたく時、同時にちょっとだけ強さを変えると波紋が出てくるのです。ポーン、ポーンではなく、なっている間にポンとやると、波紋が出てくるのですよ。

**櫻井** なんだかわかるような気はしますが、よくわからない。同じ場所をたたかれるのですか？

**灰野** 同じ時もあるし、違う時もあります。でも、みんなの耳がそこまでよくないというのが問題です。

**櫻井** 違いがわかってくれればいいですね。もともと「たたく場所で音が違う」ということをわかってくれればいいのですが。私には灰野さんが演奏されているときに、たたく場所の音色の違いがよくわかるのですが。

**灰野** 問題はあれけど、面白いと思いますよ。勝手に言ってますが、大学院が作曲家で、大学院をもっと超えたらポリゴノーラがある、って、そういっちゃえばいいんです

よ。プロと知っているなら、そこまで聞き取れ、って。挑発的になっていいと思う。

**櫻井** それで喧嘩になるわけですね。

**灰野** 言葉は柔らかく（笑）。巻き込むには、生意気ですが、説得じゃだめだと思えますよ。納得してもらわなければ駄目です。

**櫻井** 納得ですか……。

**灰野** 納得です。

**櫻井** 腑に落ちる。

**灰野** はあ、ではなく、はあ～～、です（笑）。

**櫻井** へえ～～、とか、ほお～～ですね。最近、ある意味、なんでも説明しようとせずに、いったいこれは何だろう、と思わせたほうがいいのではと思うのです。

**灰野** 考えますからね。

**櫻井** そのあとで、相手の発する言葉に反応するほうが、説得ではなく納得してもらえるのではと思います。

**灰野** 先生の学術的なものを、ドカーンと見せられると、今まで自分が知らなかった辞書を見せられるようなものです。

## “普通の”パーカッションの人がたたいたら、ポリゴノーラの波紋は起こらなかったんです

**櫻井** 最後の質問に入ってもいいですか。

**灰野** はいどうぞ。

**櫻井** 灰野さんの CD とか YouTube を見ると、声を出すときに普通の発声法ではないですね。あれはどうしてですか？

**灰野** 声ですか？

**櫻井** はい、声です。いわゆる、オペラ歌手とかの発声と全く違うでしょ。あれは、ご自分で開発されたのですか？

**灰野** 開発と言ってもらおううれしいのですが、いつも言っているように、他と違うもの、他と違うことを 50 年思い続けて、声を出し続けていますから、そうやってきていると思います。そうとしか言いようがないのです。

ちょっと話を変えてもいいですか？

**櫻井** どうぞ。

**灰野** 僕、息子さん（櫻井）元希君と話がしたい。

**櫻井** それはまたどうしてですか？

**灰野** いろんなことがやりたくて。お父さんから見て息子さんがどのように見えているかはわかりませんが、妹さんもそうですが、彼もちょっと違うんですが、和声とかを極めようと思っているのではないかと。僕はほんの少ししか、見ていませんが、と言いながら、彼のブログなどをちゃんと見えています。クラシックでもクラシックといまだに呼ばれていないような、ヨーロッパの 12 世紀から 14 世紀、中世からルネッサンスの頭のもので、彼が去年くらいにやったコンサート、ギヨーム・デュファイの曲ですが、これを紐解いて、おそらくあそこまで深くデュファイを研究している人なんていないんじゃないかと思います。実は僕、和声とかやっていないのですが、興味はすごくあるんですよ。

**櫻井** へえー。

**灰野** 他に出さない一音をずーっと考えていて、当然音は一音では終わらないわけだから、繋がっていく音があって、次に絡む音が出てきます。両手のように。だんだん音が増えていきますよね。そしてやっぱり一番複合的な始まりは、和声だと思います。そういうことを研究している人間と話したくて。そういえば櫻井さんの息子さんじゃない、ってなって。たまたま僕がウィリアム君（徳久ウィリアム）と一緒にやったのを元希君が見に来てくれて、こんな風に僕の声进行分析してくれているんだ、と思って、いつか話したいと思っています。是非一緒にやりたい。

**櫻井** 整数倍音の研究をしていたら、ふと気が付くと、オペラの特にソプラノなんですけど、誰が歌っているか、個性がないのです。

**灰野** あっ、簡単ですよ。それは、人に聞かせるために、機械になっちゃってるからです。もう、音の高さ、大きさだけを求めるから、個性が出なくなっているのです。

**櫻井** で、その対極にあるのが灰野さんです。

**灰野** 僕は、大きい声も高い声も訓練して出しますが、オペラにはなりたくない。あと、ちょっと語弊があるかもしれないが、黒人音楽のゴスペルがあります。もちろん尊敬していますが、あれにもなりたくない。

**櫻井** あれはすごいですね。

**灰野** ただゴスペルにもなりたくない。

**櫻井** ゴスペルや、オペラの透き通った声の対極に、灰野さんの声があると思うのです。

**灰野** そうです。全部そうです。

**櫻井** 私が灰野さんの声を聴いた時に、これは非整数倍音の塊だと思ったんです。非整数倍音の音を出しているの、ポリゴノーラの音を聞いた時に、すぐわかったのではないかと思います。

**灰野** 僕は、何度も言いますが、ポリゴノーラは僕の楽器だ。で、櫻井さんはそう言ったのですが、「そう叩いてほしかった」と言ってもらったんで、共犯者です（笑）。

**櫻井** 残念なことではあるのですが、灰野さんのようにたたいてくれる人はいないのです。

**灰野** そうでしょう。僕しかいないんです。

**櫻井** あのたたき方は、どこから出てくるんだろう。

**灰野** 初めに、(櫻井) 真樹子さんが普通のパーカッションの人に「たたいてくれ」と言っていたら、何も波紋は起こらなかったんです。かえって、そのほうがポピュラーになったかもしれない（笑）。僕なんか、間に入っちゃったから。

**櫻井** それで、ちょっと思い出したのですが、私が新しい音階を作って、有頂天になっていたのですが、もう一つのポリゴノーラを広める方法として、ポリゴノーラで、普通のドレミが出るように作ってはどうか？

**灰野** それは、そういうピッチに調整した“楽器ポリゴノーラ”を作るということですか？

**櫻井** はいそうです。

**灰野** それはいいと思う。

**櫻井** 今のままでは、世の中と離れすぎているように思います。

**灰野** それはそう思います。ポリゴノーラは、いきなり大学院、つまりわからない世界のものですから。

**櫻井** そうしないと、作ってもう 5 年以上たつのですが、これ以上広がらないような気がします。本当にポリゴノーラが好きな人は嫌だと言うのです。

**灰野** そう思います。

**櫻井** でも、そうしないとこれ以上広まらないような気がします。

## 聴いてもらいたいのは 100人なのか、1万人なのか、世界中なのか

**灰野** 先生がどうしたいかにかかっています。それを明確にすることです。

**櫻井** 最初はポリゴノーラを作って、全員とは言いませんが、少しずつ分かってくれる人が出てきて、広めてくれると思ったのですが、結局わかってくれたのは灰野さんを含めて少数の人だけでした。このままで、私が死んだら無くなってしまいます。先ほども言いましたが、継承が大事だと思うようになって、継承するためにはどうしようかと思って MIDI-PAD などに音を割り付けました。また、鉄はどうですか、などと先ほど聞いてみたわけです。

**灰野** 鉄はやめましょう。

**櫻井** ポリゴノーラの表面の模様はやめましょうか。

**灰野** そこにお金がかかるなら、それはプロ仕様にしましょう。先ほどの、ドレミのポリゴノーラを作るという話ですが、ポリゴノーラから出る倍音の出方が変わるのですか？

**櫻井** それは変わりません。

**灰野** それではやめましょう。

**櫻井** ドレミの整数倍音が突然出るわけではないのです。

**灰野** それは、丸いマリimbaです。

**櫻井** そうですね。

**灰野** なんか特徴がなかったらダメです。

**櫻井** MIDI-PAD に割付けた音を、ドレミにしましょうか？

**灰野** その相談は受けられません。

**櫻井** すごく迷っているのです。新しい音階は、異常なんです。それで、音楽をすることは今の人には考えられない。で、ピッチも変だと。

**灰野** 間違っていると聞こえちゃうわけですね。

**櫻井** 何か気持ちが悪い、というだけで終わってしまうのではないかと危惧しています。それで、皆さんが良く親しんでいるドレミにしたほうがいいのかなあ、と思うようになりました。

**灰野** それでは、ポリゴノーラの意味と価値がないんじゃないですか？

**櫻井** その通りですね。そこを灰野さんにご相談しようとしてきました。やっぱりそう

ですよね。

**灰野** どうしたいかです。僕が50年音楽をやらせてもらっていて、いつも意識していることは、10人に聴いてもらえばいいのか、100人に聴いてもらえばいいのか、1万人に聴いてもらいたいのか、それで自分の位置が決まります。

**櫻井** そうですね。その通りですね。

**灰野** 僕は初めから1万人に聴いてもらおうとは思わなかった。10人は寂しいけれど、100人の人が来てくれれば、変に誤解されない。自分がそう思わないのに、1万人の人に聴いてもらいたいと思ったら、専制君主みたいでしょ。

**櫻井** 私も、たくさんの人に聴いてもらいたいと思ったら、自分をどこかで殺しているような気がします。

**灰野** そりゃ、そうですよ。僕は、言葉でいうと、「いかにリスクを背負うか」です。大袈裟な言い方ではなく。

**櫻井** 一番輝いているのは、自分がしたいことをしているときではないでしょうか？

**灰野** それだけは自信があります。僕は、自分がやりたくないことをやった覚えはないので（笑）。

**櫻井** そうそう、その時が一番輝いていると思うのです。

**灰野** やりたいことをするんです。

**櫻井** 私もそうです（笑）。

**灰野** 僕はやっと50過ぎてから、なんとか生活が音楽でできるようになってきて、あとは、さっき言った100人にしたいのか、1万人にしたいのかで。1万人が欲しければ、どうしてもピッチを普通（ドレミ）にしてしまうんですよ。

**櫻井** そこなんですね、灰野さんが、「櫻井さんどうしたいんですか」、って問いかけている、100人なのか1万人なのか、世界中なのかは。

**灰野** 現音（現代音楽）の、すごい有名なパーカッショニストに櫻井さんの論文を読ませたら多分納得するから、ポリゴノーラがどういう楽器か。演奏の仕方の指示は一切せずに。多分、僕の幻影が出てきちゃうから。

**櫻井** それで、このポリゴノーラの本を作ったのです。むつかしいことは後ろに全部まとめて、終わりに灰野さんとのこの対談を入れようとしています。

**灰野** あ、そうか。これを作れば、その本を献上できるんですね。

**櫻井** 本当にわかってくれる人を一人でも増やさないとだめなんです。それで、この本を書き始めました。

**灰野** イメージですけど、海外にはクセナキス（※4）の大学とか、シュトックハウゼン（※5）なんかかんとかとかあるんじゃないですか？そういうところに献上すればいいですよ。

**櫻井** でも、それをするためにはこれを英語にしなければなりませんよ。

**灰野** 櫻井さんは英語に堪能でしょ？

**櫻井** でもこれを英訳するのは大変です。これを書くのに 5 年かかっています。これを書き始めて、一応できました。でもあとで自分で読み直すと、頭が痛くなってきたのです（笑）。こりゃあかんわ。そこで、むつかしいのは、全部後ろにまわして、全部書き直しました。

**灰野** 前にいただいたいろいろな論文とか資料、数字がいっぱい書いてある奴、あれも全部入っているのですか？

**櫻井** そういうものは全部付録に入っています。それが必要な人がいるかもしれないので。

**灰野** 僕は、全く正直言って、わからないのですが、そういうのが好きな人もいるから、置いとけばいいんじゃないですか。

**櫻井** 置いときます（笑）。それから、コラムのように、読みやすいものもちりばめて、なんとか最後まで読んでもらおうとしています。本の中には、QR コードで、灰野さんも含めたいろいろな人の演奏が聴けるようになっています。また一ノ瀬トニカさんが MIDI-PAD で作曲したものも含めることにしています。普通のポリゴノーラなら、2 音以上弾くのはなかなかむつかしいのですが、MIDI-PAD なら、10 個でも同時に押さえることができるので、また違った曲ができると思います。一ノ瀬さんは以前は一音一音を使ったけれど、今度は特に和音を中心に作曲したい、とっておられました。

**灰野** 聞いてみたいなあ。これはとどのつまりですが、問題はやる人ですから。

**櫻井** 演奏する人ですか？

**灰野** そう、その人が普段何を考えているかです。人間誰でも褒められたい。でも、「誰に」かが問題です。仲間なのか、まだ知らない新しいファンなのか、アカデミックな人に褒められたいのか。これはしょうがない。

**櫻井** 整数倍音、ドレミの音階ができてから、2500 年くらいたっています。これに抗うのは大変ですよ。一人で（笑）。でも、みんなが段々ドレミの音楽に飽きてきたらいいのになあと思っているのです。そういう兆候が少しあるから、もう一度本を書き直してみようかと思いました。

**灰野** 食品の添加物が問題になっているでしょう。でも僕に言わせると、音楽なんて添加物だらけですよ。J-POP なんか添加物だらけですよ。

**櫻井** まあ、ある意味仕方ないことですよね。明治の初め、日本が植民地にならないように欧米に追い付こうとしたときに、ドレミを輸入したのですから。

**灰野** わかってます。さらに僕が実感としては、ドイツ式教育だったのですよね。あとからクラシックも好きだから、いろんなピアノを聞いたけど、好きなのはみんなロシア側ですよ。ドイツは固いんです。

**櫻井** 民族性もあるのでしょうかね。ドイツ語自体もかちっとしてるし。

**灰野** いやいや、命令ですよ、私たちに響いてくる言葉としては。

**櫻井** ドイツ式の弊害は、どこにあるんでしょうか？

**灰野** ジャスト（Just）です。譜面通りに弾かないといけないのです。

**櫻井** そうか、リズムを動かしてはいけないのですね。

**灰野** そう、メトロノームにぴったり合わせてね。よく言う、時間を厳守する、という。譜面にジャストに弾かなければならないのです。結局これに音楽が支配されているんですね。そうなると、政権もどうなればいいのかなあとか。

**櫻井** 国の政治で、音楽が変わるとは思いませんが、国が豊かにならなければ音楽や文化は発展しませんね。

**灰野** ええ、ええ。余裕がなければだめですよ。

**櫻井** 本当にコロナや、この 10 年間、20 年間、日本はそういう意味で、文化が発展しませんでしたね。

## ポリゴノーラの音のうねりを捕まえるには、テクニックが必要です

**灰野** 櫻井さんの下に僕がいて、櫻井さんの上にもいろんな世代がありますね。長くつながっている中で、おそらく 50（歳）くらいから気づくことがあると思うんです。あるとき、悔しいけれど、日本人の血が流れていることに気づくのです。それは、右翼とか左翼とかの問題ではなく、つまり、食べてるものがお米とかで、その民族が、「なんでドレミでなければならないのか」って、やっぱり気づきだすのですよ。僕は最初から気づいていました。

**櫻井** そういう人がもっと増えてくれたらいいのになあ。そうなんです。一番典型的なのは、琵琶なんです。琵琶はほんとにドレミではないのです。あれがずっと続いていることに日本人として誇りを感じます。

**灰野** いいなあ。

**櫻井** そういう意味では、三味線もお箏もそうなんです。でも今は、調弦をチューナーでやってしまっているんですね。本当に日本人が持っている音階、音の感覚を呼び覚ましてもらいたいなあ。

**灰野** 440 Hz (※6) でなくていいです。

**櫻井** だから、この本こそ日本から発信すべきものではないかと思います。

**灰野** それこそ（三味線の）“さわり”というのはリズムの揺れで、ポリゴノーラは音をうねらせることを証明する楽器です。“さわり”は“うねり”とは違う。

**櫻井** ポリゴノーラのうねりというのは、なんとなくわかるんですが、もう少し説明してもらえませんか？

**灰野** 音が同じところでとどまっていない。パーンとギターでも複数の弦を弾いても、それぞれの弦は響きあっても、うねらないと思うんです。でもポリゴノーラは(1枚で)ピッチの違う倍音を、たたく場所、たたき方で出せるわけだから。たたくと、グワーンと鳴るんです。それこそ、私には目に見えるんです。

**櫻井** 見えてるんですね。

**灰野** それこそ、こうなんですよ（空中に両手を広げる）。だからこれを手でつかんでるんですよ（笑）。つかんだのをこっちにやるとか。だから変なアクションが生まれるんです。

**櫻井** 目で見えるんですね。

**灰野** ポーンとたたいてこう来るのを、普通の作曲家なら指示しないんで、たたいて終わりだけど、僕はたたいたあとに、すごく長く鳴っているから。大袈裟に言うと、フツと吹いてもいるんですよ。

**櫻井** 確かに、灰野さんはポリゴノーラをたたいた後、その上に手をかざして動かしたりして、音をうねらせていますね。

**灰野** ええ、動かして、手に吸い付けてヒュッとやる。面白い話をしますよ。先生がポリゴノーラをたたいているのを見て、元希君が「だめだ。灰野さんのようにやれ」と言ったのを聞きましたが、まさにそれで、たたいた時に、そのミュートをものすごく早くしないとできないんです。これが鳴りきっているうちに捕まえないと別のところに行

ってしまいますから。それは、あえて言うとテクニックです。このようなテクニックをパーカッショニストに要求する楽器は、ほかにはないです。

**櫻井** 私が、灰野さんに最初にお会いしたときに言われて覚えている言葉は、「この楽器には私が今まで培ったテクニックの全部が注ぎ込めます。」です。言われて、すごくうれしかったです。

**灰野** こうやってたたいても、人が見て、なんでこう手をかざしているんだろうって思っているかもしれないですが、ポリゴノーラは鳴っててくれるから。半分指で1か所を抑えたり、またヒュッと離すと、かわいい混ざり方をするんです。

**櫻井** それを頭で理解しなくとも体で表現して、いろんな弾き方をしているのを拝見すると、あっ、今このモードの音を残しているとか、よくわかります。

**灰野** 今まで僕は全くやる気はなかったのですが、いわゆる先生が始まるときに講演をやって、僕が演奏をして、それを解説する人がいてもいいかもしれない。僕が演奏しながらやってもいいです。はじめは普通に演奏して。

**櫻井** それ、すごく面白いですね。ここを押さえる、とこうなるんですよ、って。そうするとわかってくれるかもしれません。耳の良し悪しには個人差があるから、わかりにくい人にはわかりにくいけれど、説明されるとわかるかもしれない。

**灰野** 確かにいつも思うんですけど、ぶら下がっているやつ（ポリゴノーラ）は、よく鳴るんです。ミュートしないから。ただ、動いちゃうんですよ（笑）。

**櫻井** その通りです。ポリゴノーラが動いたり回転したりして、連打できないですね。

**灰野** あれが、パーンと何かで張って固定されるといいのかもしれない。でも固定すればするほど、響きが悪くなる。変な子供作っちゃったんですよ。

**櫻井** あれは、なかなかのきかん坊です（笑）。ちょっとでも触ると音が変わります。

**灰野** 機嫌がね。

**櫻井** 灰野さん、「明和電機」（※7）ってご存じです？

**灰野** なんとなくわかります。

**櫻井** 1993年に土佐兄弟が始めた会社で、おもちゃのような楽器を作っているのですが、その一つに電磁石（ソレノイド）でスイッチを入れるとボンとたたくような仕組みで楽器を作っているんです。ひょっとしたら、そのような機構を使って、ポリゴノーラの鍵盤楽器のようなものが作れないかと思っています。灰野さんのように、たたける人がいないから、MIDI-PADと同じように誰でも簡単に弾けるようにするのはどうでしょう。

**灰野** いいじゃないですか。何でもやっていいと思う。あとで失敗はしょうがないですよ。

**櫻井** お金がかかるんだけど（笑）。

## ポリゴノーラを聴くと今までとは違う気分になれる、 それくらいがいいんじゃないかな

**櫻井** （部屋にあるリュートを指さして）いい、リュートがありますね。

**灰野** あります。

**櫻井** リュートは、どうしてあんなに小さな音しか出ないんでしょうね？

**灰野** 大きくする必要がなかったからですね。

**櫻井** そうでしょうね。

**灰野** あと響いたからです、多分。楽器って、何かでかいものが出てくると、でかくなりますね。

**櫻井** 会場とかですかね。

**灰野** なんだ、俺の音聞こえない、となって、ボディーを大きくしたり、弦を増やしたり。

**櫻井** 同じ人間が演奏しているのに、リュートのように小さな音しか出せない楽器もあれば、ピアノのようにどでかい音が出る楽器もありますね。何ですかね？

**灰野** 不公平だね。でもおそらく、聞く人数が増えていったからかなあ。オペラも本来は小さな声でも聞こえていたんだけど、ものすごくでかいところで人がいて、いくら高い所から歌っても、吸収されちゃうんで、とにかくでかい声を出せ、っていう声量を訓練して、皆同じ声になっちゃったんじゃないかなあ。僕はいろいろなクラシックを聴くけれど、オペラだけは聴けないんですよ。恥ずかしくて。

**櫻井** 私もそうです。

**灰野** キンキンして。

**櫻井** ほんとに。

**灰野** でも意外かもしれないけれど、シャリアピン（※8）は好きです。

**櫻井** 低い声はいいのですか？

**灰野** はい。先生はどう思うか知らないけれど、あれはロックですよ、僕のなかで。

**櫻井** シャリアピンって確かロシア人じゃなかったですか？

**灰野** ええ、あの迫力っていうか、俺は好きにやるぞ、みたいな。

**櫻井** そこに本当の音楽があったのかなあ。

**灰野** クラシックのオペラだけは許してほしい。

**櫻井** よく似てますね。

**灰野** ところで、元希君はどうして声楽にいったんですか？やっぱり小さいときから歌好きだったんですか？先生がギターを弾いているのは聞いているわけですよ。

**櫻井** ええ、もちろん聞いていました。私はよくバッハを弾いてました。

**灰野** バッハですか。

**櫻井** 音楽は好きだったのかもしれませんが、母親が広島のエリザベト音楽大学で少年合唱団をつくるのを聞いて、そこに入団したのが始まりです。

**灰野** ちっちゃいときから声楽ですか。

**櫻井** そうです。そして、広島大学の教育学部で声楽をしたのですが、物足らなかつたんでしょうね。卒業した後芸大に行くって言って。エーッ。今から芸大、金かかるわ、と思ったのですが、やりたいことはやらせなあかんわ、と思って。

**灰野** すごい親子だよ、うらやましいな。

**櫻井** 彼も、サルディーニャ島の合唱なんか聴いて、声の出し方はいろいろやっているといます。でも、やっぱり和声で、ぴったり合った時のなんていうか気持ちよさにはまっていますね。あれはすごいって。

**灰野** あー、恍惚ということですか？

**櫻井** そうですね。

**灰野** 一体化するということですか？

**櫻井** 何か、もこもこと上がっていくんですけど。彼は彼で、学術的なことも興味があるらしく、バッハの今までの機械的な演奏よりも、ダイナミックなすごい迫力のあるバッハを演奏します。

**灰野** それすごい興味がある。

**櫻井** この間、生田緑地の菖蒲園でやった、灰野さんのポリゴノーラの演奏会が良かったです。中央に能の舞台があって、すり鉢状に回りが木に囲まれている場所です。素晴らしかった。

**灰野** 自分でもうっとりしてました（笑）。

**櫻井** あそこは、音が広がっていくんだけど、抜けていかない。木々の葉っぱで。

**灰野** 漂うんです。

**櫻井** そう、そう。

**灰野** ものじゃなく、ある種の霊的なものになっていると思います。

**櫻井** やっぱり、ポリゴノーラはガムランと一緒にだなあ、と思いました。外でやるといい。あれをもっとやりたいなあ。

**灰野** やりましょう。

**櫻井** ただ、平地だとまた違うのかもしれない。

**灰野** 聞こえないです。ポリゴノーラの高さが、これくらいなので、平地だったら音が上に逃げていきます。やっぱり、あそこはお能をやる舞台ということで、考えていると思います。周りの環境とか。

**櫻井** そうか。

**灰野** あの場合は、ほんとにいいところを選んだんですね。リハーサルを部屋でやるのと全然違います。

**櫻井** ひょっとしたらポリゴノーラに光明が見える、と先ほど言ったのは、若い人が今の音楽に飽きてくるのではと思うのですが、同じことがロックにもおこったのではないですか？

**灰野** 1960年代後半にいわゆるロックンロールが定型しかなくなって、そこでいろんな要素を(取り)入れはじめました。しかし、いろんな要素を入れたけど、新しいものは一つもなかった。結局、ガタイがあって、それ自体を否定じゃないけれど、違うものを全く別に作り上げようとした人はいませんでした。僕しかいません。ロックというものに乗かって、民族音楽を入れたり、エレクトロニクスを入れたりしましたが、土台は、ツツ・タッタ・ツツ・タッタなんです。一番極端な例は、ジミヘン(ジミ・ヘンドリックス)です。ジミヘンはギターをグアーンとやったんだけど、後ろでは依然としてツツ・タッタ・ツツ・タッタでした。同じビートを刻んでました。僕がジミヘンと比較されたとき、「俺はドラムをたたくぞ」、って言ったんです。そうすれば、違うリズムを刻み、音楽が違うものになるでしょ。ジミヘンはドラマーに指示をしていないから、ドラマーはいわゆる当時のフリージャズに近いことをやれば事が済んでしまった。

**櫻井** そうですか。そういう見方ですか。

**灰野** それは、自分がロックサイドにいるからです。結局フリージャズも生まれたけれ

ど、リズムじゃなくて、体のノリがジャズなんです。音の響きは新しいけれど、一番肝心なビートをたたっているドラムがジャズなんです。よく聞くと、スイングのジャズだし、反対にスイングしていないと、いうねりが出てこない。古いと新しいをどうバランスとるかにみんな気を付けているけど、僕はそれとはまったく違うところから始めたいので。

**櫻井** やっぱり、ポリゴノーラですね。

**灰野** うまいですね。

**櫻井** やっぱり、これを若い人に知ってもらいたいですね。

**灰野** 美術館がいいです。

**櫻井** 確かに、美術館に行く人は、いろいろ考えているし、新しいものはないかと思っているし。

**灰野** やっぱり問題意識が高い。普通のロックのコンサートに行くと、ワーと騒いでいて、新陳代謝はいいけれど、頭は先にはいかない。

**櫻井** そうですね。結構、美術館で最近音のことをやっているところもありますね。

**灰野** たまにです。ポリゴノーラという新しい楽器があつて、それが認知され、僕が先生について行って、というのがいいです。企画書を出してください。

**櫻井** 私の書く文章では駄目なので、誰かに助けてもらいます。

**灰野** それこそこれを人々が聴き、穏やかになり、穏やかになりながら、価値観が変わる、というのは言い過ぎで、今までとは違う気分になれますよとか、それくらいがいいんじゃないですか？

**櫻井** 私の理解は、整数倍音から生まれたドレミは、天上の音楽で……。

**灰野** それは言わないほうがいい。それで敷居が高くなっちゃうんで。

**櫻井** いや、天上の音は、地上では鳴っていない。

**灰野** うん、先生、それは我々の認識（笑）。

**櫻井** 人には通じない。

**灰野** どれくらい先生が人に伝えたいかです。僕は大学生に、ものを伝えたくない。小学生に伝えたいのです。ひらがなで話すし、“ひらがなのような”ものの伝え方をします。それは馬鹿にしているのではなく、やっぱり、知らないうちに我々は特別の環境にいて、特別なものを作っているでしょ。そうすると、我々にとって普通だと思っていることが、彼らにとっては大学院なんですよ、僕たちが言うことは。だから、みんなが仲良くするにはどうしたらいいのかな。ちょっとだけ違うものも学ぼうよ、っていうのが

いい。

**櫻井** 最近この本を書いていて大変よくわかります。人に読ませると、「先生の書いたものはむつかしすぎます。2、3行読んだら頭が痛くなります」

**灰野** 先生、悪いけど、昔の資料でも2ページ見てわからなくなりました。

**櫻井** 昔はもっとひどかった（笑）。

**灰野** それくらい言わないと納得しない人種もいる。先生はそういう人が専門ですよ。

**櫻井** これを若い人に伝えようとしたら、その真ん中くらいのスタンスで行くしかない。

**灰野** 先生がいて、中間の人がいたほうが良い。真樹子さんがいいんじゃないかなあ。

**櫻井** すごくむつかしいです。

**灰野** 長く何かをやっていると、知らないうちにオーラがあるのです。

**櫻井** 多分そうかもしれない。

**灰野** 相手が、何か反応する部分を見つけて、それをつついてあげる。

**櫻井** それは少人数でないとできないですね。東京でコンサートをしたときに、最初に私が講演したのですが、前に座っている人が、うんうんと頷いてくれているので、わかってきているのかと思って、それをあとで人に言うと、「それは、頷かないと失礼に当たる、と思っている人ですよ」といわれてがっかりしました。

**灰野** そうそう、社交的な。

**櫻井** 誰もわからなかったでしょう、と言われました。

**灰野** 高橋悠治さん（※9）が、噛みついたじゃないですか。

**櫻井** その時に、高橋さんに「新しい音階を不協和度の計算式を使って作るのは不自然だ」、と言われたことがずっと引っかかっていました。最近やっと、その式を使わなくても簡単に同じ音階ができるやり方を考えだしたので、それも本に書きました。同じ音階ができるのです。要するに、音が調和するということはどういうことかを基礎に作ると、同じ音階が得られました。わけのわからないものからできた音階は、わけのわからないものだけど、わけのわかるものからできた音階なら、いいかなあと思います。

**灰野** ふーん。

**櫻井** それが5年くらいかかって、やっとクリアーできました。

**灰野** じゃ、いいアドバイスだったんですね。

**櫻井** そうですね。やはり、ちゃんと物を見ておられるなあ。

**灰野** やはり音楽家ですから、プロフェッショナルですよ、誰もが認める。でもわたく

しがある時、高橋さんに噛みつきましたね。

**櫻井** はいはい、そうでした。

**灰野** 櫻井さんを擁護しようと思って。

**櫻井** はい、擁護されているのはよくわかりました。えらいことが始まった（笑）。中に入らないでおこう、と思いました。擁護されているのだから、私は口を挟まないでおこうと（笑）。いろんなことがありましたね。今日は長い間、対談していただきありがとうございました。

(※1) “ピザ” と “ドーナツ”

ポリゴノラを叩いたときの2種類の振動モード、“ピザモード”と“ドーナツモード”のこと。ピザモードは、ピザを切るときのように円の中心を通る直線で、振動する部分としない部分が分けられる。ドーナツモードは、振動のありなしが同心円状になっている。“ピザ”と“ドーナツ”2種類のモードが同時に起こる“ミックスモード”も存在する。

(※2) MIDI-PAD

LAUNCHPAD MIDI コントローラー (Novation 社製) のこと。

(※3) テリー・ライリー (1935～ ) アメリカ合衆国出身。

ミニマル・ミュージックの代表的作曲家。

(※4) クセナキス

ヤニス・クセナキス (1922～2001) ルーマニア出身。ギリシャ系フランス人の現代音楽作曲家、建築家。

(※5) シュトックハウゼン

カールハインツ・シュトックハウゼン (1928-2007) ドイツ出身の現代音楽家。

(※6) 440 Hz

一般的な調律のピッチの標準。1939年ロンドン、万国規格統一協会 (ISA) で採択された。

(※7) 明和電機

1993年5月に、弟の土佐信道と兄の土佐正道で結成された芸術ユニット。2001年に兄の正道は「定年退職」で脱退。2023年にデビュー30周年を迎える。

(※8) シャリアピン

フョードル・シャリアピン (1873～1938) ロシア帝国カザン出身のオペラ歌手 (声域: バス)。

(※9) 高橋悠治さん (1938～ )

東京生まれ。柴田南雄、小倉朗、ヤニス・クセナキスに作曲を学ぶ。作曲家、ピアニストとして活躍中。